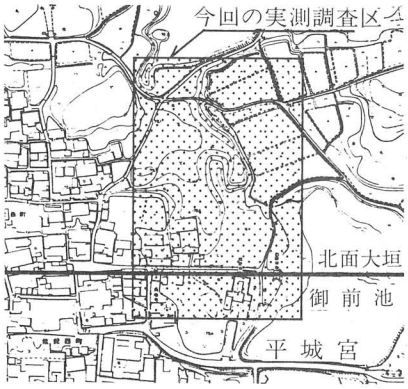
Ⅵ 寺院等の調査

① 超昇寺城の実測調査

超昇寺城は、平城宮跡の北西部に築城された近世の平城（ひらじろ）である。古く15世紀には当城のすぐ東に存在したとされている超昇寺に関連のあった超昇寺氏の築城が知られる。しかし、現在遺存する遺構の形態に整備されたのは、おそらく16世紀に入って松永、筒井両氏の抗争が激化してからのことと考えられる。

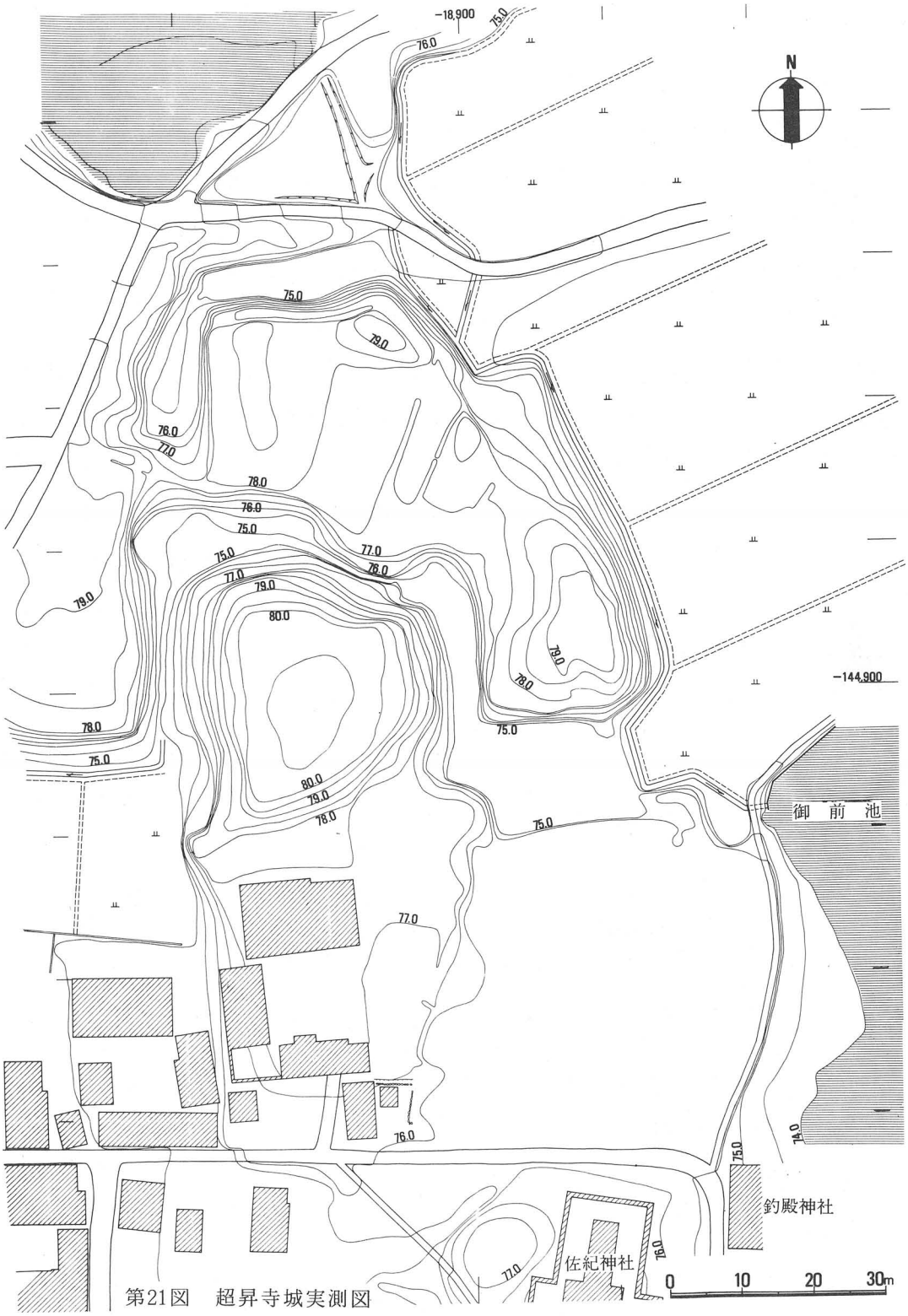
超昇寺城の範囲がどこまで及んでいたかは諸説のわかれるところで明確になし得ないが、現在、御前池の北西約100mの地点に四周を空濠で囲む方形の台地があり、この部分が当城の主郭部と考えられている。現地形から明確に判断し得る超昇寺城の遺構は、この方形郭の周囲50～100 mの範囲に限られており、従って今回実施した実測調査もこの部分を中心に行った。

実測調査は、トラバース測量によって、予め調査区一帯に基準点を設定し、これをもとに各点間の方向線に従って平板測量を行った。平板測量には測距アリダード（WILD RK 1）を用いた。当器種は、内部に自動補正装置を備えており、高低差の激しい地形や、遠距離に際しても、測距が簡単で高精度の成果を期待できる。平板測量には、直接平板上の図に地形や等高線を書きこんでいく直接法と、平板上の図とは別にスケッチブックを併用して地物等の位置を把握し、内業において両者を合成する間接法があるが、今回のように広範囲で高低差の激しい地形には多くの測点を要するため、後者が好適であるのでこれによった。成果品は第21図のとおりである。



第20図　超昇寺城実測調査位置図

なお、周辺には他にも当城の痕跡の一部と思われる地形の落差が随所に認められ、今後こうした実測調査が進めば中近世の平城宮跡周辺の概要を知るうえで貴重な資料となるであろう。



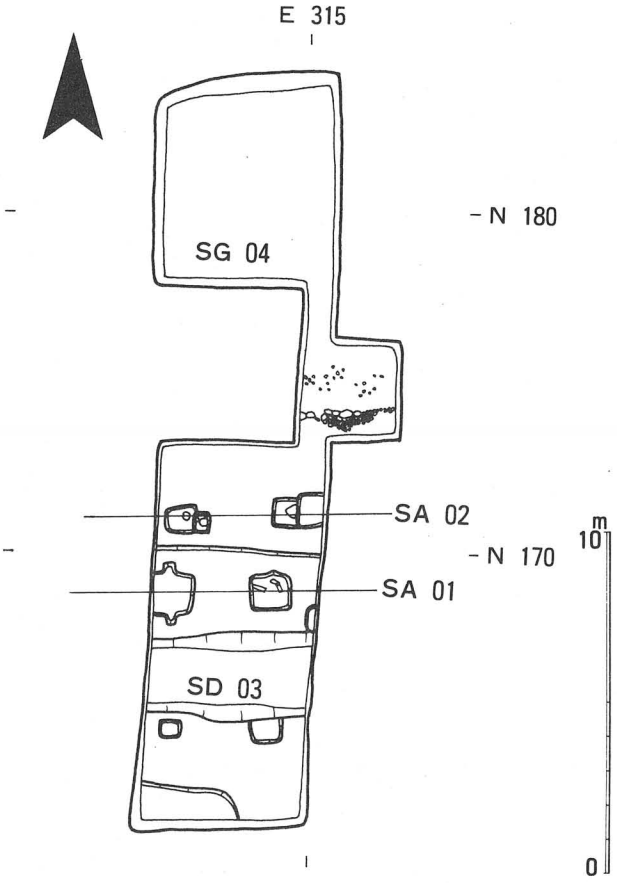
第21図　超昇寺城実測図

② **法華寺西南隅の調査**（第123－4次）

調査地は、第80次調査としておこなった阿弥陀浄土院の北西区域（現、公立学校共済組合職員宿舎）の北側で、法華寺と阿弥陀浄土院との境界位置にあたる。

遺構　遺構は耕土・床土・灰褐粘質土下の黒色粘土面（自然堆積土）で検出した。耕土上面下約40㎝である。検出遺構は塀・溝・園池などである。

SA01は東西塀で、柱間寸法は10尺である。柱掘形は一辺1.2ｍと大きく、東側柱穴には長さ20～50㎝、幅約15㎝、厚さ約5㎝の板材が多く入っていた。西側柱穴には南北両方向からの柱抜取痕跡がある。SA02はSA01の北にある東西塀で、柱間寸法は10尺である。西側柱穴には、30㎝大の扁平な石の上に立つ柱根が残る。東側柱穴にも上部扁平な石がある。SA01のすぐ南側には幅2.7ｍ・深さ0.5ｍの素掘りの東西溝があり、木簡43点、軒瓦5点のほか、土器・木製品が多量に出土した。



第22図　第123－4次発掘遺構図

SG04はSA01の北5ｍで南岸となる園池である。調査区が狭いため、池岸は東西方向の約3ｍのみを検出し、池の規模・形状は明確ではない。黒色粘土を約40㎝掘り下げて池とする。斜面の上端に約30㎝大の石を一列に並べ、その周囲は小さい河原石を黒色粘土にはりつけるようにおいて岸をつくる。埋土から木簡1点、軒瓦2点・土器類が出土した。

遺物　SD03出土の木簡の主要なものには、「狛首乙山謹解申」

「□□十二箇月利本□貳拾□□□」「兵衛狛弟山乙乙乙乙」や「二房・三房」など僧房関係のものなどがある。

土器類はSD 03・SG 04とも奈良時代後半のもので占められる。SG 04からは墨書土器（須恵器鉢A、外面に「壇」、円面硯がある。SD 03出土の木製品には墨書「廣石」のある曲物、しゃもじのほか、棒状製品、くさび形製品、建築部材などがある。

第23図　SG 04護岸石組

まとめ　今回検出したSD 03及びSA 01・SA 02は法華寺と阿弥陀浄土院とを画する施設と思われる。SD 03と第80次調査区の北端で検出した東西溝SD 845との間は坪境小路の位置にあたる。SA 01は柱掘形が大きく、法華寺の南を画する塀である。後にSA 02につくりかえられる。SG 04は規模・形状は不明であるが、法華寺の南西隅にある小さい池である。今回の調査区の北側でおこなった第95－1次調査では池岸は検出していないことから、南北幅は約10ｍとなろう。

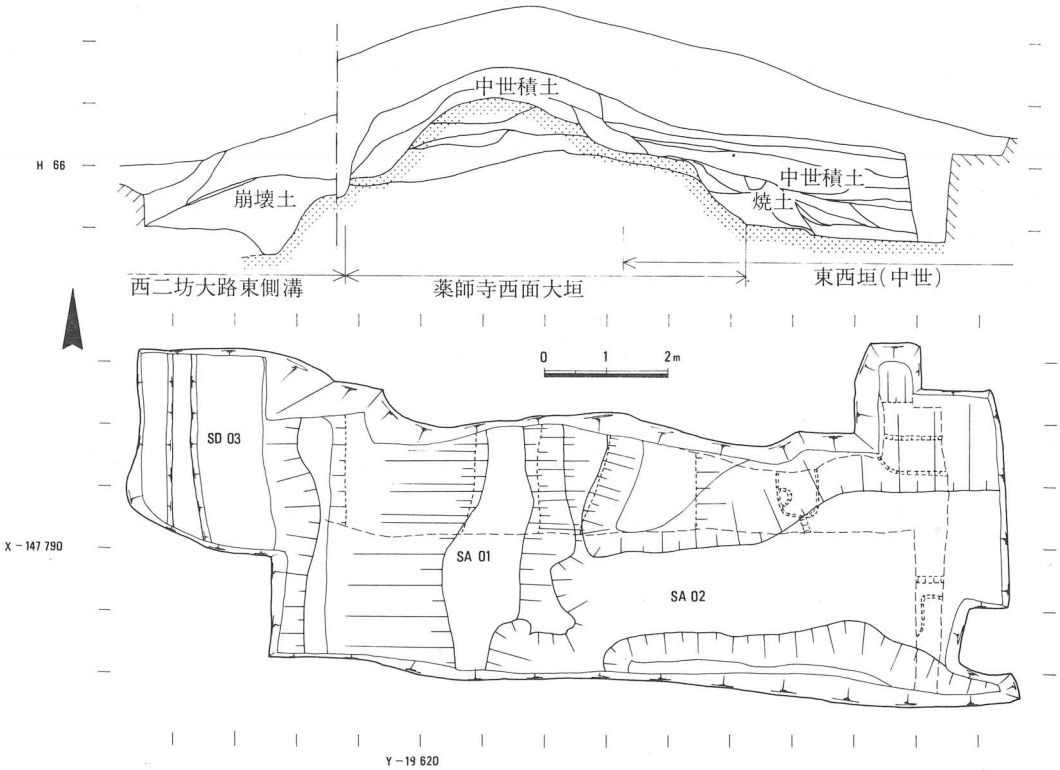
③　**薬師寺西面大垣の調査**（第123－18次）

本調査は(株)墨運堂による通路新設に伴う事前調査で、当該地は土壇状高まりのある竹藪があり、すぐ南での発掘調査（第118－27次）によって、薬師寺の西面大垣が確認されていることから、この北延長部の検出が予測された。高まりは当該地の南端で南北約15ｍにわたって存在するが、それより北は約3ｍの落差をもって低い平坦地となっており、この位置には『醍醐本諸寺縁起集』所収「薬師寺縁起」等にみえる西北門を想定することができる。

発掘調査に先立ち、周辺を含めた24ｍ×30ｍの範囲の地形測量を行い、縮尺百分の一の地形図を作成した。

高まり部分で14ｍ×5ｍの東西に細長い発掘区（Aトレンチ）、平端部で条間小路との交点附近に2ｍ×12ｍの南北に細長い発掘区（Bトレンチ）を設定した。

遺構　Aトレンチで検出した遺構は、南北大垣SA 01とその東側にとりつく東西垣SA 02及び柱穴等である。SA 01は、地山を削出して犬行・築地本体・側溝SD 03を造成している。これが奈良時代の薬師寺西面大垣、即ち「薬師寺縁起」にみえる築垣にあたるものと考えられる。築地本体基底部幅は約2.4m（8尺）で、これも上記記録と一致する。犬行は築地本体の東側で約1.5m、西側で約1mの幅をもつ。側溝はSA 01の東側即ち寺地内にはなく、西側にのみ存在する。SD 03は西二坊大路東側溝であって、深さ約1m、幅は西肩を検出できなかったが2m以上である。東側犬行の東に中世の土器を含む焼土の堆積があり、おそらく13～14世紀頃SA 01が焼失崩壊したものと思われるが、その直後に修築されている。修築されたSA 01は基底部幅約4mの土塁状のものであり、同時にSA 02が造られている。SA 02も基底部幅約4mの土塁状のものである。柱穴はSA 01心から約4.8m東のSA 02下にあり、奈良時代のものと考えられるが性格は不明である。このほか、柱穴



第24図　第123－18次Aトレンチ発掘遺構・断面図

より時代のやや下る溝状遺構２条があるがこれも性格は不明である。

Ｂトレンチで検出した遺構は、東西溝SD 04、SD 06、南北溝SD 05、SD 07、土壙SK 08、SK 09などである。SD 04とSD 05はトレンチ中央で交差しており、出土遺物から奈良時代末期頃のものと考えられる。SD 06及び一部石の護岸をもつSD 07は、SD 04・05廃絶後に掘削されたものである。SK 09は中世、SK 08は近世に掘られたものである。小穴３はいずれも中世以前のものと思われるが性格は明らかではない。

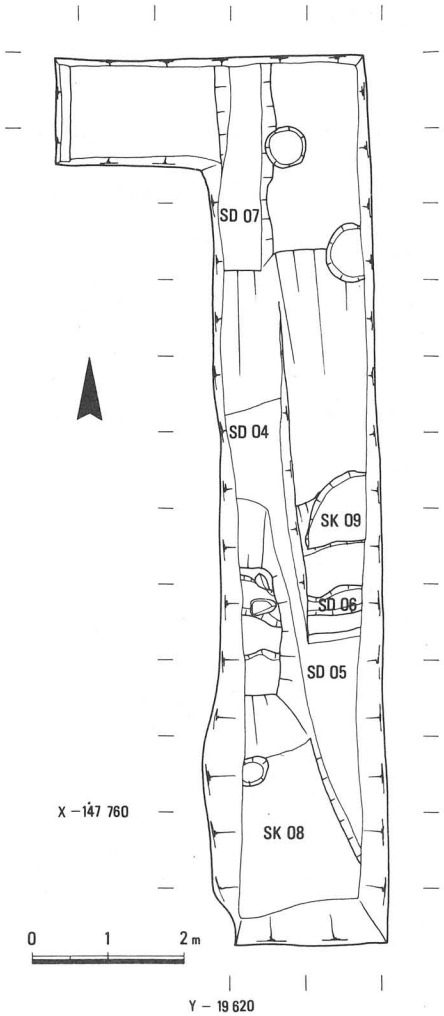
遺物　瓦・土器ともに多数出土した。瓦では、軒丸瓦 6726－Ｂ型式２点、6726－Ｅ型式１点（以上本薬師寺創建瓦）、6304－Ｅ型式４点、軒平瓦 6641－Ｇ型式７点、6641－Ｈ型式４点、6641－Ｉ型式１点（以上本薬師寺創建瓦）、6664－Ｏ型式１点がある。土器には、13世紀末から14世紀にかけての瓦器が多く、梵字を記した墨書土器１点が含まれている。

まとめ　以上の発掘結果から次の四点を指適することができる。

①南北大垣は構築方法及び出土瓦から薬師寺創建時の築垣と考えられる。

②出土瓦器から13～14世紀に南北大垣が修築され、同時に東側に東西垣が附加された。これらの垣は、延寶頃作成の『伽藍寺中并阿弥陀山之図』等にみえる「角院」等の子院に伴うものであろう。

③当該発掘地域は通称「カンノキヤマ」と呼ばれている。延寶２年に編纂された『薬師寺濫觴私考』には、寺地内に「金置山」と称する小山があって養老２年に伽藍を当地に移した時、薬



第25図　第 123－18次Ｂトレンチ発掘遺構図

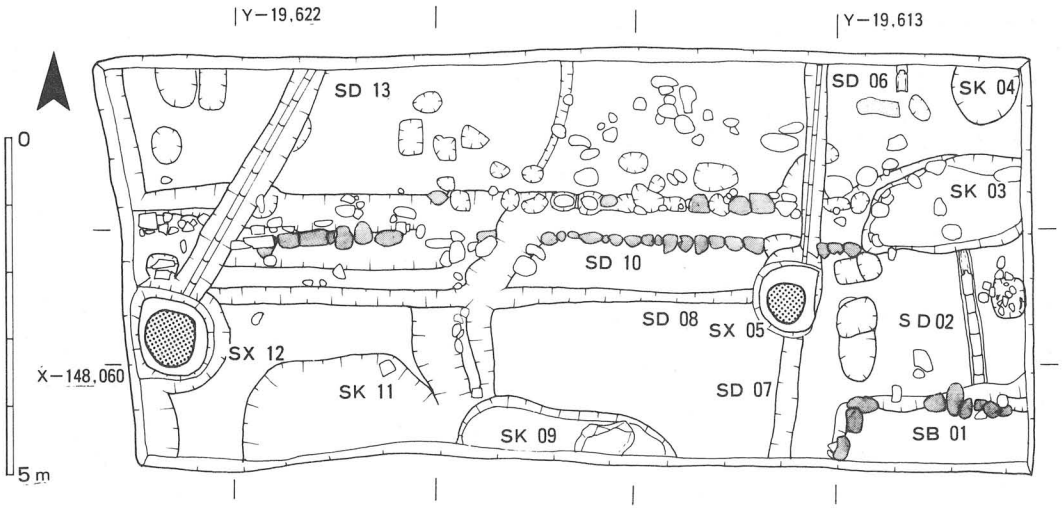
師佛像を鋳造したとの伝承を記す。この金置山が当該地区にあたると考えられるが、上記の伝承を裏付ける遺構は検出されなかった。

④薬師寺西北門を確認することはできなかったが、その推定地附近の地形・遺構等からなお存在の可能性を残している。その位置および規模については今後の課題となろう。

④　薬師寺西院跡の調査（第123－10次）

本調査は、駐車場建設予定地の事前調査である。調査地は、現在の薬師寺伽藍の西側で、西院推定地であり、西面大垣推定地に接している。現状は水田である。調査は東西14m、南北6mのトレンチを設定して進めた。

検出した遺構は、建物基壇・溝・井戸・土壙などであり、いずれも中世以降のもので、奈良時代の遺構は検出されなかった。床土直下には、ほぼ全面に焼土が認められ、この地域がかつて火災に罹ったことを示している。焼土はとくに南半部にいちじるしく、土壙SK08・09には大量の焼土が投棄されていた。遺構のほとんどが焼土堆積上面で検出したものであり、焼土堆積下で検出した遺構はSB01、SD02・10である。SX05は直径約1mの穴を掘り、瓦質土器を枠板として径約60cmにめぐらしている。ここから三方に溝が延びており、北に延びるSD06には竹



第26図　第123－10次発掘遺構図

筒が遺存しており、上水を導いたものと考えられる。SX 05はきわめて浅いので井戸ではなく、水溜めの施設と思われる。SX 12も同様の施設であるが、枠は縦板組みである。これに伴なうSD 13にも竹筒が遺存している。SB 01は川原石を縁に組んだ建物基壇である。検出の状況は、基壇外装というほど石組が整ってはいなくて、基壇土はさほど固くなく、また瓦片も含まれており、軟弱な基壇のために乱れたものとも考えられる。SD 10は、内法幅約30㎝の川原石組の溝である。部分的ではあるが、石組がよく残っている。埋土から鎌倉時代の土器片が多く出土している。

さて、本調査地は薬師寺西院にあたる。伽藍の状況を描いた「薬師寺絵図」「伽藍寺中幷阿弥陀山之図」「伽藍寺中之図」などは、いずれも江戸時代の絵図であるが、これによって西院の仏堂の位置がある程度わかる。今回の調査地は、寿明院から弥勒堂にかけての位置に相当するが、建物遺構は基壇のごく一部を検出したにすぎなかったので、具体的な状況を把握するには至らなかった。焼土に含まれている瓦類、土器類は室町時代末のものであり、SD 10埋土に含まれている土器の年代とを合わせて考えると、火災は放火によって西室、養天満拝殿とともに西院も焼亡したと『薬師寺年記』に記される永正13（1516）年の火災か、西院の名はあげられていないが、五条から九条まで悉く放火されたと『薬師寺志』に記す亨禄元年（1529年）の兵火のいずれかであろう。

⑤　西大寺の調査

本調査は史跡西大寺境内での護摩堂移転地の事前調査である。当該地は本堂の東方約10ｍに位置し、西大寺創建以前の平城京右京三坊々間路にあたり、また、寺蔵の「西大寺々中曼荼羅図」からは鎌倉時代叡尊再興伽藍における東室の遺構が予想された。調査は南北７ｍ・東西6.5ｍのトレンチを設定した。

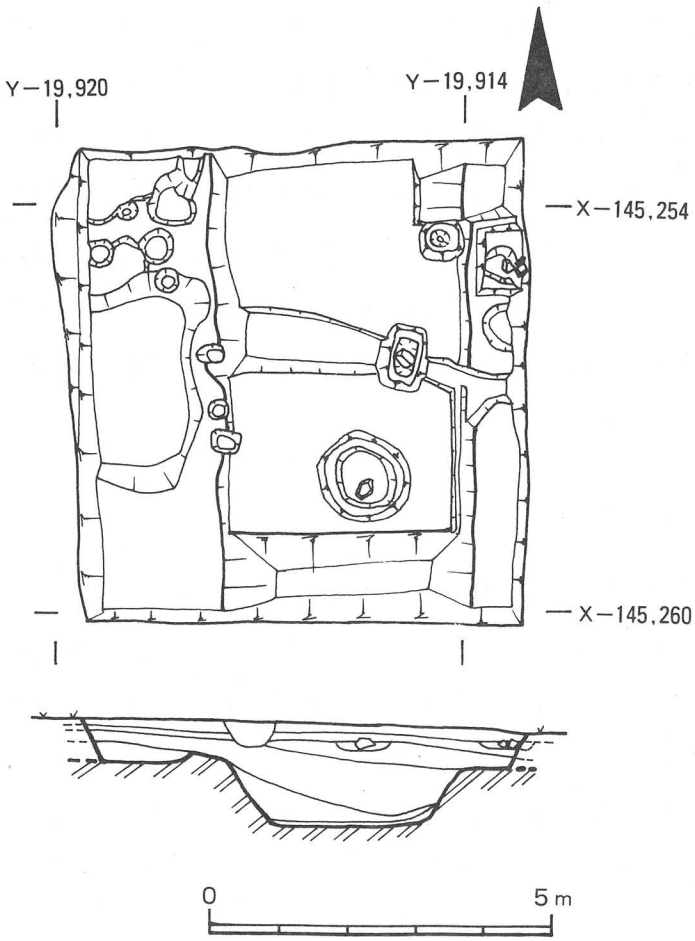
発掘の結果、中世以降の三層の遺構面を確認した。最下層では素掘りの南北大溝１条を検出し、地表下約60㎝の地山面から掘り込まれていた。この溝は上幅3.5ｍ・底幅2.2ｍ・深さ1.0ｍの逆台形断面をなし、溝底からは中世の磁器片１点が出土した。

南北溝を埋めたてた後に、全面的に黄褐色の山砂で厚さ約20㎝の整地を行なっている。この上面では南北２間分（3.6ｍ）の柱穴と根石を検出した。柱間は６尺等間と狭く、方位は北で東へ約17度振れている。中世以降近世にかけての礎石建ち建物の一部と考えられる。

発掘区北側ではさらにこの遺構を覆って灰褐砂質土で整地が行なわれている。上面では焚火の跡かと思われる焼土の詰まった浅い窪みや、根石１ケ所を検出した。これらの遺構は、さらに近・現代の瓦片が多数混った厚さ10㎝ほどの表土で覆われている。

以上のように、発掘区が狭いため当初予想された奈良時代の条坊遺構や中世の東室遺構を確認することはできなかった。今回検出した南北大溝は古図等によっても知られていない遺構であり、時期的には寺の平安衰退から鎌倉復興の間に位置付けられる可能性が考えられ、西大寺伽藍の変遷を解明する上で重要な手がかりとなる。

また、現西大寺南門の西方約30ｍの所でも発掘調査（第123－13次）を行なったが、斜行溝１条と円形土壙を検出したのみで、奈良時代の顕著な遺構はみられなかった。

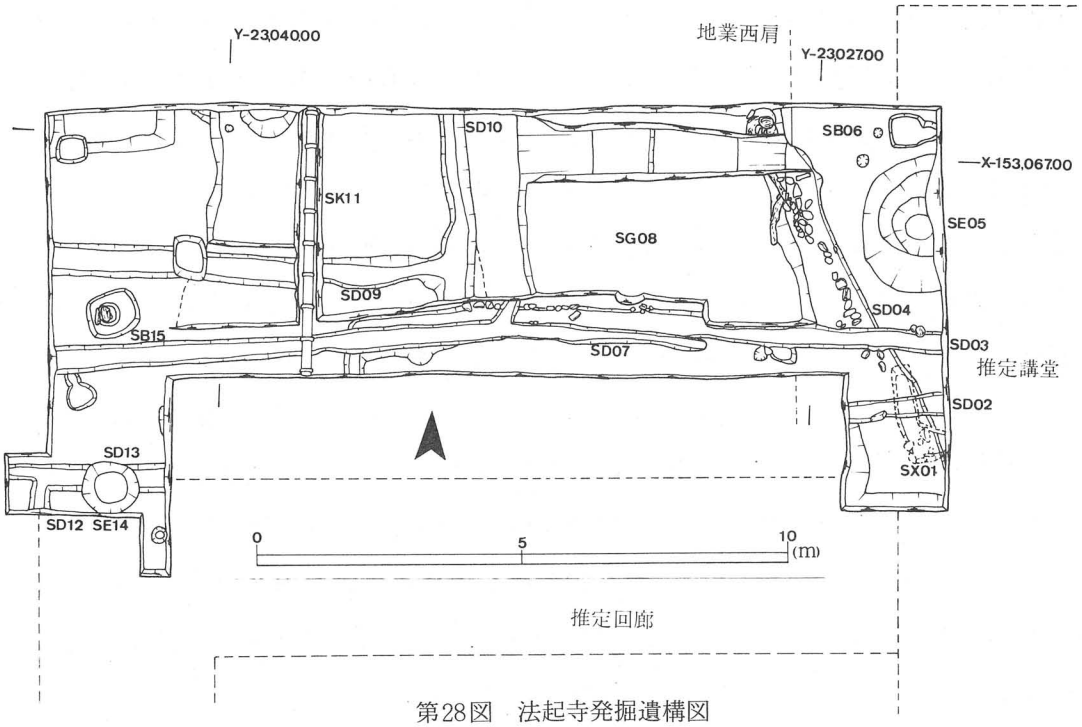


第27図　西大寺護摩堂移転地発掘遺構・断面図

⑥　法起寺の調査

法起寺収蔵庫建設に伴う事前調査で、奈良県教育委員会と奈良国立文化財研究所が合同で実施した。調査地は、石田博士の復原による講堂の西、北回廊の北接部に当る。飛鳥～奈良時代の遺構には、ＳＸ01、ＳＤ04・12・13、ＳＢ06・15がある。

ＳＢ06は掘込み地業を施した建物基壇で、国土方眼北に対し北で西に３度振れる。地業はわずかしか残っていない。ＳＤ04は、北で西に28度振れる石敷南北溝で、ＳＢ06の掘込み地業に重なる別の掘込み地業内に、底石のみ残存する状況で検出した。聖天堂西側で検出した石組斜行溝、三重塔の南で検出した石組溝と方向が一致する。掘込み地業に伴うことから礎石建物の東側雨落溝と考えられる。ＳＸ01は、ＳＤ04と関連する版築土下で検出した。ＳＢ06に関連する遺構と思われるが、性格不明である。ＳＤ12・13は、既に昭和36年の石田博士の調査で検出されたもので、西回廊の西側、北回廊の北側の地覆抜取溝に想定されたものである。ＳＢ15は、掘立柱の建物または塀であろう。本調査で、時代は特定できなかったが、２つの基壇建物の存在はを明らかにできたことは大きな成果であった。



第28図　法起寺発掘遺構図

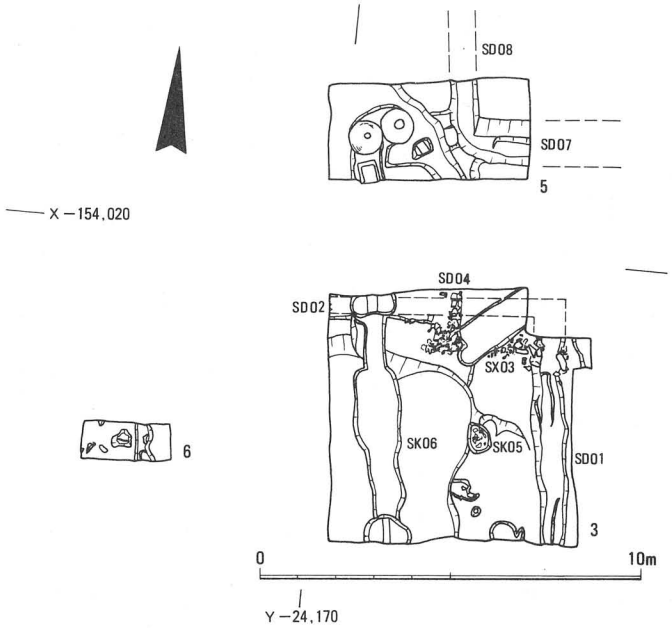
⑦　法隆寺の調査

法隆寺防災工事に伴う調査を昨年度に引続き橿原考古学研究所と共同で行なった。本年度は、西院を中心とし、昭和55年6月から昭和56年3月まで、合計60ケ所・面積約1000㎡を発掘した（第37図）。発掘地は旧導水管埋設箇所・埋設予定地であるが、重要な遺構を検出した部分では管を迂回させるために遺構の範囲確認調査を行なった。ここでは、顕著な遺構を確認した西室周辺地区、講堂東地区、旧回廊地区及び現回廊基壇の断ち割りの成果について報告する。なお、8月に南面大垣南側の町道舗装工事に先立つ事前調査も行なった。当該地は若草伽藍の塔基壇西隅にあたっていたが、後世の削平により、遺構は検出されなかった。

1　西室地区（第29図）

西回廊と現西室に挟まれた地域には、承暦年間に焼失した当初の西室が存在したと考えられている。第3トレンチでは、東西溝1条、南北溝1条、瓦敷および瓦列、礎石据付け穴と思われる小穴、瓦器・瓦を含む大土壙を検出した。南北溝SD 01は、一部しか残存していないが、両岸を石で護岸している。幅約60㎝、深さ約30㎝。奈良時代～平安時代の瓦・土器および中世の瓦器が少量出土した。東西溝SD 02は東側が新しい土壙で壊されていたが、SD 01と接続するものと考えられる。瓦列SX 03はSD 01の西岸から始まり、東西方向に配している。またSD 01の西約3ｍの地点には、南北方向の瓦列SD 04がある。SX 03・SD 04は丸瓦の凸面を上に順次玉縁に重ねるように組んでいる。SX 03と類似した遺構は、聖霊院の解体修理に伴う発掘調査でも検出されており、基壇の土留めと考えられている。SD 04は丸瓦列の下に平瓦凹面を上にして組んだ瓦列があり、これは排水施設である。SD 04はSD 02を埋めた後に設けている。SX 03・SD 04及び周辺の瓦敷は後世の火を受けている。SK 05は小礫が詰まった小さな穴で礎石据付け穴の可能性がある。これに対応する礎石据付け穴を確認するため、SK 05の西約10ｍの地点に第6トレンチを設けたが、第1トレンチの西南部の中世の大土壙SK 06がここまで及んでおり検出できなかった。第5トレンチでは、SD 02の北5ｍの地点で鉤の手に折れ曲る溝SD 07・08を検出したが性格は不明である。

当初の西室は『法隆寺別当次第』によれば承暦年間（1077～81年）に落雷のため北頭一房を残し焼失し、以後再建されなかったとある。今回検出したSD 01、SD 02、SX 03、SD 04 は焼失前の西室に関連する遺構と想定され、SD 01・02は基壇を回る溝と考えれば、今回は北一房の一部を検出したことになる。SD 01、SX 03の位置関係から焼失前の西室は東室と対称の位置に配されていた事が明らかになった。東室の規模は資財帳記載の四僧房のうち、長さ17丈5尺のものと一致することから、西室も東室とさほど規模に差がないとすれば長さ18丈1尺の僧房を当てるのが適当ではないだろうか。



第29図　西室地区発掘遺構図

2　講堂東地区（第30図）

講堂東地区は『聖徳太子伝私記（抄）』では、「次三面僧房。此講堂之東浦在北室跡。石居少々残見。講堂同時焼失了。中昔比也。（以下略）」とあり、また、昭和36年の台風で松が倒れた時、その根本に礎石のあったことを確認しているところから、この地域に北室関連遺構の存在が予想された。

第7トレンチでは地表下約30㎝で焼土を混えた瓦層に当り、この瓦層の下で北室に関連する遺構を検出した。検出した遺構は、東西溝1条・南北溝1条、掘立柱塀2条である。南北溝SD 09、東西溝SD 10は両岸を瓦と石で護岸され、残りの良い部分では幅約0.4m、深さ0.2mで互いに接続するが、SD 09はさらに北に延びる。SA 11は径約10㎝程の柱根を留め、柱間2.2mの1間分を検出した。SA 11はSD 10と方位を揃える。SA 12はSA 11・SD 10とは方向を異にする柱列で2間分を検

出した。建物の可能性もある。国土座標に対する方位の振れは若草伽藍の振れに近い数値を示し、西院伽藍創建以前の可能性がある。以前確認されていた礎石は原位置を保っていず、遺構との関わりはわからない。礎石は方形で上面は一辺80cmを測る。

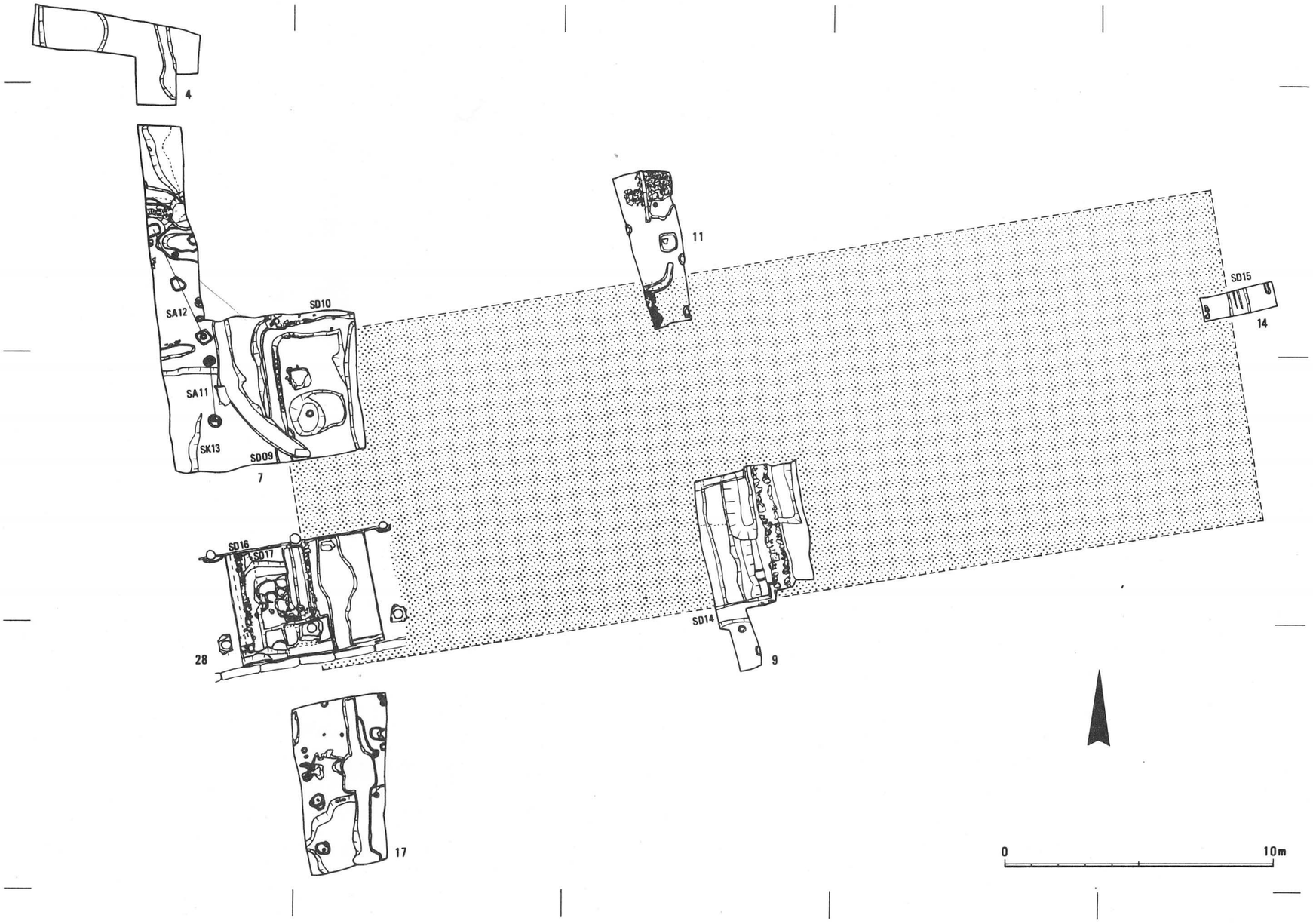
SD09・SD10は建物基壇を囲る雨落溝と考えられ、位置的に北室に伴うものである可能性が強い。新たに埋設する導水管が北室の近辺に予定されているため、北室の範囲を確認することが必要になり、第9・11・14トレンチを設定した。第9トレンチでは南の雨落溝SD14、第14トレンチでは東の雨落溝と考えられる溝SD15を検出した。これらの溝から北室の基壇規模を復原すれば、東西35.4m、南北12.4mとなる。軒の出を考慮すれば、資財帳に長さ10丈6尺、幅3丈8尺と記す僧房に比定できよう。

講堂にとりつく東側北面回廊を断ち割った第28トレンチでは、SD09の延長部を確認するとともに、SD09の西で石と瓦で護岸した南北溝SD16を焼土層下で検出したが性格は不明である。両者は方位を揃え、溝心々で2m離れた位置にある。

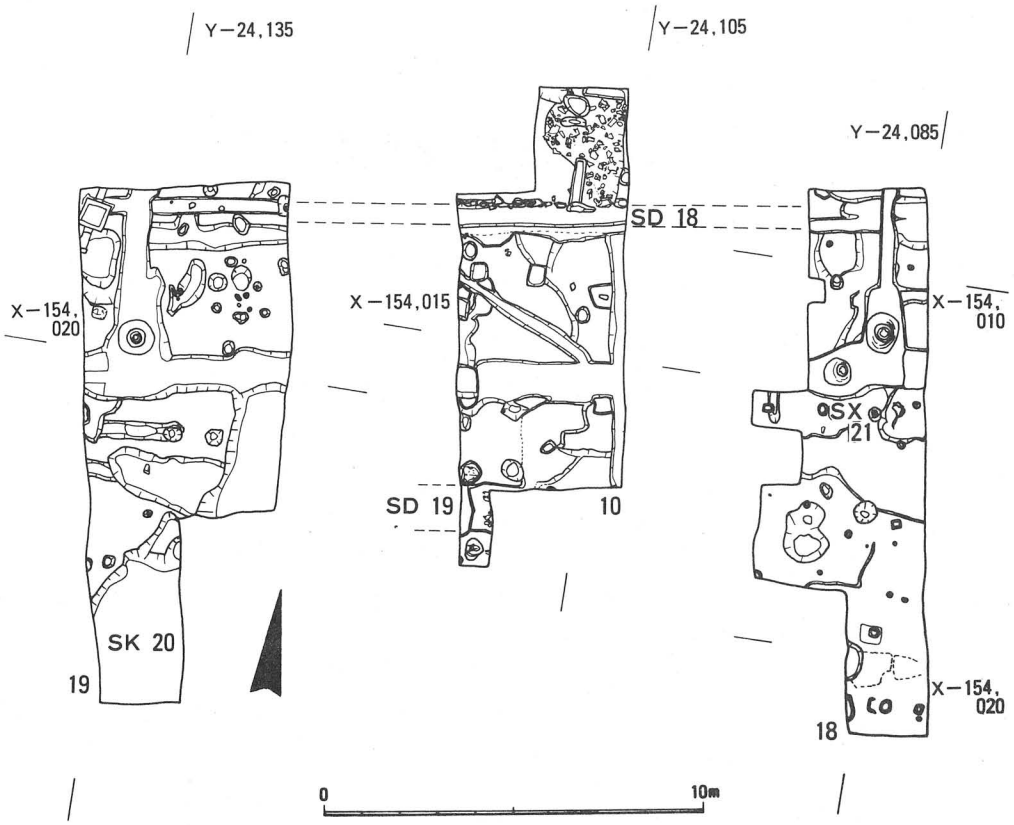
3　旧北面回廊地区（第31図）

現在鐘楼・経蔵を経て、大講堂にとりつく北面回廊は、当初、講堂の前で閉じるものであった。これは『資財帳』から推定でき、浅野清氏の調査で北側の雨落溝が検出され、その実在が証明された。旧導水管がこの回廊の位置に埋設されているため、今回第10・18・19の3トレンチを設定し、旧回廊位置の再確認を行なった。各トレンチともに、後世の撹乱がいちじるしく、基壇はすでに削平されていたが、北雨落溝SD18を検出した。とくに第10トレンチでは凝灰岩北側石の一部を検出した。南側石は、わずかに痕跡をとどめるのみである。溝幅は約0.5mを測る。第18・19トレンチでは凝灰岩片がみとめられただけである。南雨落溝SD19は第10トレンチで検出した。幅は1.3mである。この結果から、基壇幅約6.5mの規模に復原できる。

第19トレンチ南端の土壙SK20からは飛鳥時代から中世にいたる瓦が多量に出土した。また第18トレンチでは、平安時代の土器を埋納したピットSX21を検出した。



第30図　講堂東地区発掘遺構図

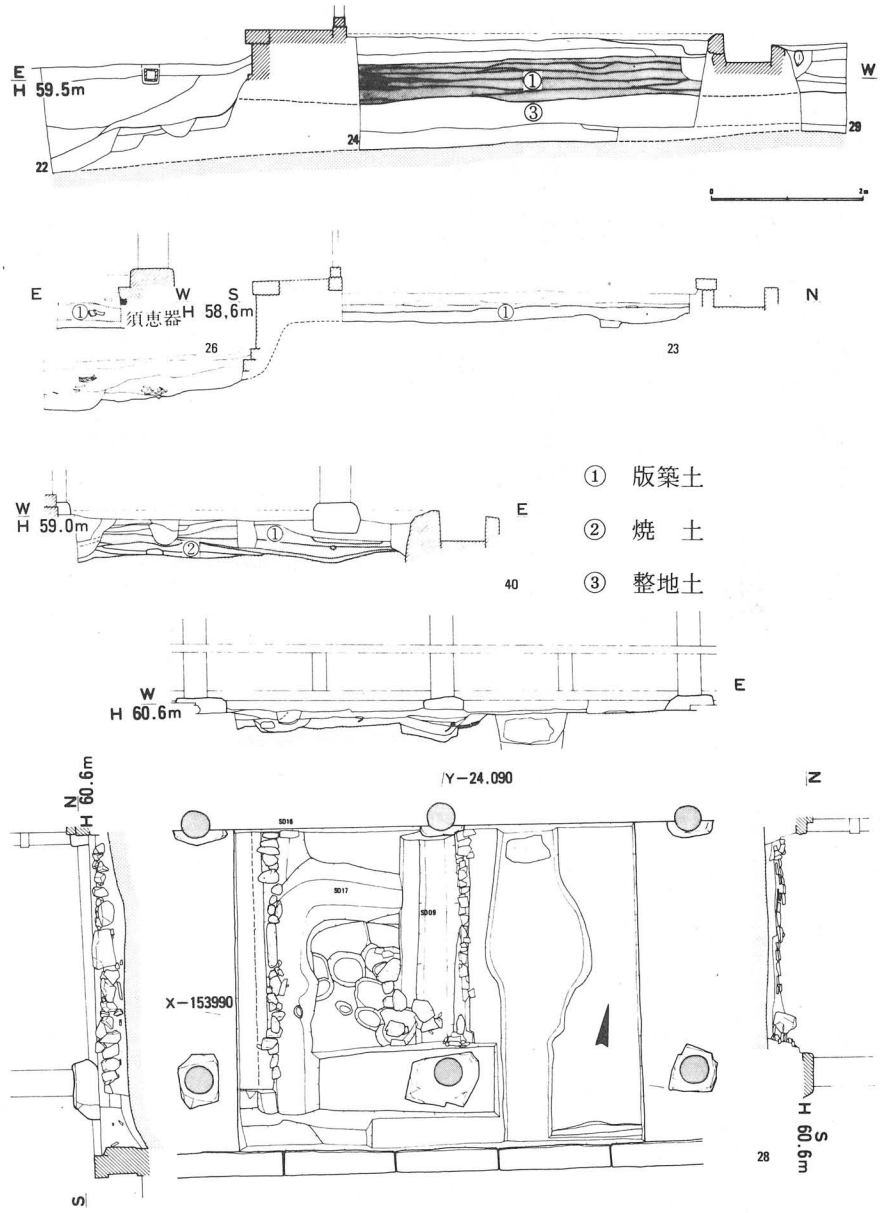


第31図　旧北面回廊地区発掘遺構図

4　現回廊地区（第32図）

回廊地区では導水管の通る位置に11ケ所のトレンチを設定した。上面は各トレンチともに、大正修理の際の積土がみとめられる。第23・25トレンチでは、地山上に版築が約30㎝の厚さで行なわれている。第23トレンチでは版築土中から、平安時代初期の須恵器甕（第34図）が出土した。これは、この頃に基壇の部分的な改修が行なわれたことを示している。回廊南側の第26トレンチ地山高は、第23トレンチの地山高に比し約１ｍ低く、寺造営にあたり、大規模な切土が行なわれたことがわかる。第24トレンチでは地山上に原堆積土があり、旧表土も認められる。

その上に約40㎝の厚さで整地を行なった後に、版築が約60㎝の厚さで行なわれている。地山面までは、現回廊上面から約1.3ｍを測る。回廊内外の第22・29トレンチでも地山面までは同様の深さである。整地土は両トレンチで認められるが、第22トレンチでは中世にほとんどが削平される。また、第22トレンチでは、現基



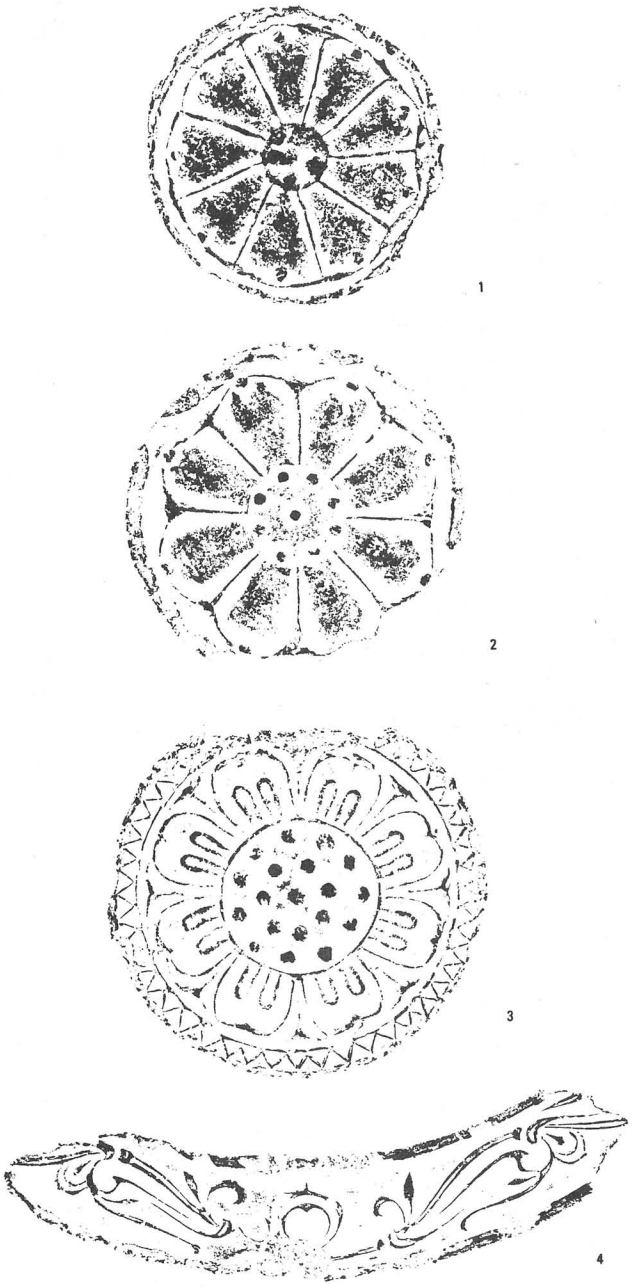
第32図　現回廊地区発掘遺構断面図

壇の下で当初基壇の地覆石と考えられる凝灰岩列ＳＸ 22を検出した。北面回廊は大講堂と同じく地山削り出しの基壇である。南側の第17トレンチの地山との差は約１ｍあり、ここでも大規模な切土が行なわれていることがわかる。第40トレン

チでは、地山上に焼土の堆積があり、その上に版築が行なわれる。版築土内にも木炭が混入している。焼土層からは鉱滓が出土し、西面回廊近辺で金属製品が作られたことを示している。

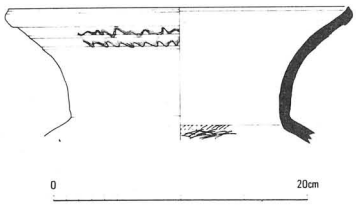
5　遺物（第33～36図）

今回の調査で出土した遺物の年代は飛鳥時代から現代にいたる。瓦がその大半をしめ、軒瓦は521点（12月末日現在）にのぼり、うちわけは飛鳥時代9点、白鳳時代156点、奈良時代11点、平安時代107点、中・近世238点である。その他、鬼瓦、隅木蓋瓦、鴟尾、面戸瓦などの道具瓦や塼が出土した。第33図1・2は若草伽藍創建時の軒丸瓦で、回廊内の土壙SK20から出土した。3・4は西院創建時の組み合わせである。ヘラ書きの文字を記した塼（第35図）がある。「貞観八年七月十日請𨚫□」と読める。しかし「𨚫」は異体字にも見られず、可能性としては、醍・酖・醴が考えられ、いずれも酒にかかわる意味をもつ。瓦工の戯書であろうか。第7トレンチ土壙SK13から出土した。また、人物または仏像の右肩を凸

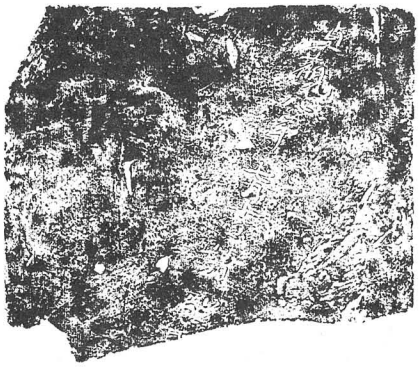


第33図　出土軒瓦

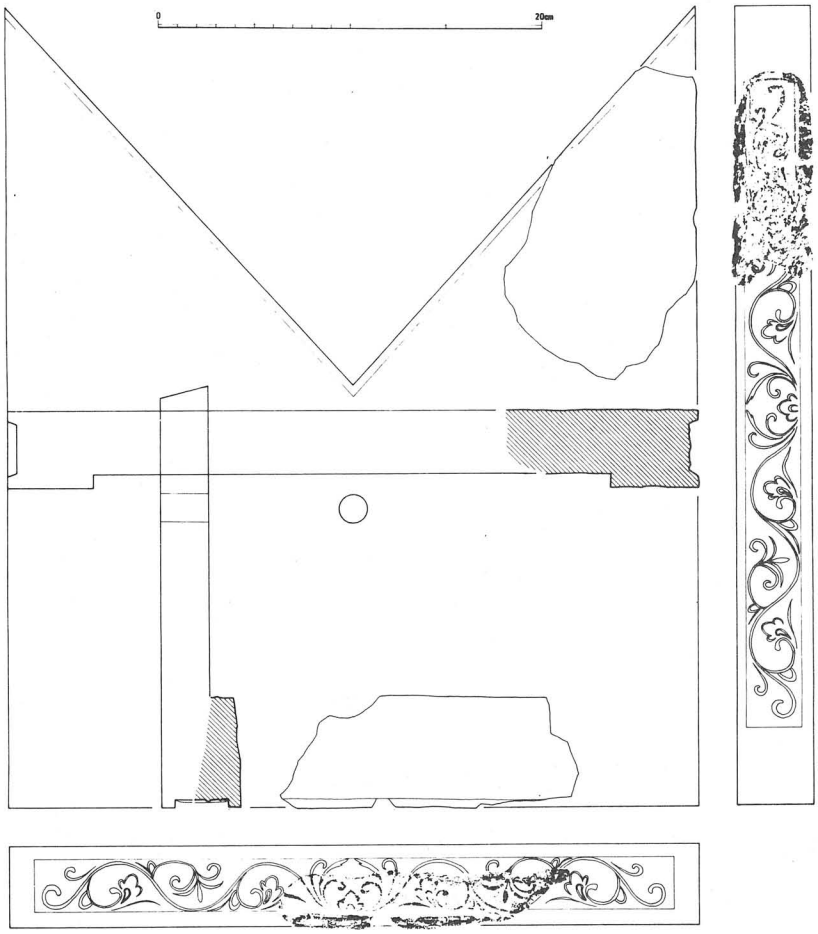
面にヘラ描きした平瓦が第19トレンチ土壙SK20から出土した。唐草文様をもつ隅木蓋瓦(第36図)が2点出土。中心飾りのあるものが第3トレンチから、三角形の刳りをもつ破片が第18トレンチから出土した。両者を合わせて復原すると、文様は中心飾りから左右へそれぞれ4回反転する均整忍冬唐草文で、2種のパルメットが交互に表現され、幅36cm・長さ42.6cmに復原できる。時代は文様の特徴からみて、7世紀末葉から8世紀初頭である。



第34図　須恵器甕



第35図　ヘラ描き塼



第36図　隅木蓋瓦